

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月22日現在

機関番号：10102
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22500532
 研究課題名（和文） 運動伝承における身体知獲得のためのキネステーゼアナログ移植の試み
 研究課題名（英文） A Try of Transplanting Kinästheseanalogon in Order to Acquire Senso-motorische Intelligenz in Transmission of Bewegungskultur
 研究代表者
 石田 譲（ISHIDA YUZURU）
 北海道教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：90113654

研究成果の概要（和文）：本研究では、運動発生に関わるキネステーゼアナログ移植の妥当性の検討を行い、どのようなアナログが、どのような学習者にとって、どの段階で移植が可能なのか体系化することを実践的に試みた。その結果、動くかたちが発生するためには、人間の主体そのものに迫り、そう動きたいという衝動を捉え、その上で、その運動のコツとその地平にあるキネステーゼアナログを整理統合することが重要であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study the writer examined the appropriateness of transplanting Kinästheseanalogon concerning the occurrence of movement and tried practically systematizing the possibility that what kind of Analogon can be transplanted by what kind of learner on what kind of stage. As a result it has been cleared that, in order to generate the moving shape, it is important to approach the man himself, to feel an impulse to move so, and moreover to integrate the knack of the exercise and Kinästheseanalogon on the horizon.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：運動伝承、身体知、キネステーゼ

1. 研究開始当初の背景

我々人間の運動に関して、これまで多くは、物体としての人間が動く、物理的な時空間の世界の出来事として捉えられ研究されてきた。しかしながら我々人間の運動は、単に物体としての身体が動くのではなく、ある意味や価値を持ち、周りの世界との対峙関係の中

で捉えることが求められる。そこでの人間の運動は、ゲーテのモルフォロジーの意味において、そのかたちを、あるがままに捉えることが必要となり、さらに外側からその動きを眺めるだけではなく、動いている本人の感覚世界から運動を眺めていかなければならない。

本申請者である石田は、これらの科学的論的

認識を背景に、動感世界における出来事を整理統合することに務め、これまでキネステーゼ体系における、運動伝承を支えるための運動実践知であるコツや、「感覚的に似た動き」であるキネステーゼアナログンの抽出を試みてきた。

本研究では、これらの成果をふまえて、抽出されたアナログンを実践現場に移植し、その有効性を確かめ、さらに運動実践の場に還元しようとする意図を持っている。

2. 研究の目的

我々が行ってきた運動は、その価値が認められ文化として伝承されてきた。この運動文化を享受し、それを生涯にわたり楽しみ、さらに次世代へ伝承していくことは、調和のとれた、心豊かな人生を送る上で、今まさに求められているところである。

これらの運動発生の道程は、物体としての対象身体を理解するだけではなく、現象身体として、人間とその周りの世界との相即関係の中で生まれ出るものなのである。これらは、現象身体をその認識のベースとした、キネステーゼ（動感）体系の世界の出来事として、近年現象学的人間学的運動学の成果として明らかになっている。

本研究はこのような我々人間の感性、感覚に基づく運動感覚世界であるキネステーゼ世界における出来事を明らかにして、実際の運動発生に持ち込むまでの一連の出来事を明らかにすることが主要な目的となる。そしてさらに、実際の運動発生に必要な運動メロディーを奏でるためのコツをつかむためには、その感じが似ている動きを探索し、見つけ、実践することとなる。この似た感じの動きは、様々な運動を獲得する際に、段階的学習を可能にするキネステーゼアナログン（動感類似例）と呼ばれるものであり、本申請者は、これまで様々な運動に関するアナログンの抽出を試みてきた。今後、この抽出されたアナログンの有効性を確かめるためには、実践現場における学習者にこのアナログンを移植することを試みることで、またどのような学習者に対し、どの段階でどの程度移植可能なのかということを検証する必要がある。

以上のように本研究では、運動文化の伝承を支える実践知としてのキネステーゼアナログンを実践現場で移植することを試みながら、その有効性を確かめ、運動実践の場に還元、提供することが目的となる。

3. 研究の方法

運動感覚世界であるキネステーゼ世界における運動発生に持ち込むまでの一連の出来事は、人間の感性の中に隠れたままで、これまでほとんど明るみに出ることがなかった。この動きのかたちが出来上がるまでの隠

れた動感世界を明らかにしていくことを意図してこの研究は進められている。そして、運動発生に必要な運動メロディーを奏でるためのコツをつかむためには、その感じが似ている動きを探索し、見つけ、実践することとなる。申請者は、この似た感じの動きである、様々な運動を獲得する際に、段階的学習を可能にするキネステーゼアナログン（動感類似例）をこれまで抽出してきた。今後、この抽出されたアナログンの有効性を確かめるためには、実践現場における学習者にこのアナログンを移植することを試みることで、またどのような学習者に対し、どの段階でどの程度移植可能なのかということを検証する必要がある。

以上のような目的を達成するため、本研究ではまず、移植のための準備として、これまで抽出してきたアナログンの整理、類型化、アナログン移植の運動財、移植先の実践現場、学習者等について細部を検討し、ついで、実践現場において、アナログンの移植と共に運動が発生するまでの一連の動きをたどった。

このような立場で身体知を獲得しようとして得られた資料を検討した結果、アナログンを運動毎に類型化、あるいは学習者をその発達段階や運動経験により類型化し、さらに運動伝承に関わるなじみの地平を生み出す根源現象を整理統合することによって、どのような学習者にとって、どの段階で移植が可能なのかということを経験的に体系化することが出来る可能性を見つけて出すことを試みた。

4. 研究成果

運動の伝承の場では、発生に関わるキネステーゼアナログンの抽出と移植が重要な問題となる。本研究では、アナログン移植の妥当性の検討を行い、どのようなアナログンが、どのような学習者にとって、どの段階で移植が可能なのかということを経験的に体系化し、運動実践の場に還元、提供していくことが本研究の目的である。

人間の運動が伝承していくためには、動く人間の主体そのものに迫り、入り込み、理解し、さらにそう動きたいという衝動をどう捉えるかということを経験的に基盤に据える必要がある。また、運動が発生するためには、その運動の動ける素となるモノドコツとその地平にあるキネステーゼアナログンを捉えること、そしてその移植作業としてのキネステーゼアナログンの運動者への導入は、運動者自身の動感世界に切り込むための周界と主体との関係やなじみの地平或いは原感情・原動感といったものも含めた人間の動感世界での出来事であることを認める必要がある。

本研究での実践の多くは障がい者のさまざまな運動の発生に導いた例証である。そこ

では、特別支援学校での教員と担当していた児童達との、およそ2年間にわたる運動伝承の現場を厳密に分析することに務めていった。その一部は運動伝承研究会発行の「伝承」に発表した。その要旨は以下の通りである。

支援学校等においては、日常生活に必要な最低限の行動や運動を保証するための学習は行われているが、それ以上の実りある豊かな生活をおくるための身体知を獲得するような指導については行われないことも多い。ここでは、小学校4年生のソトス症を発症した小学校4年生の身体的および知的障がいを持つ児童の、6年生に至るまでの運動発生の例証を取り上げている。

担当教員が担当するまでは、当該の児童に対し、両親や学校において、もはや日常的な運動能力を向上することは難しいと感じているようであり、本人も運動することの世界は自分とは関係ない世界での出来事であって、自分で汗を流して動くこと、自ら主体を持って自己運動することの世界とは違う、まるでテレビの映像を見る、あっちの世界で行われている出来事と捉えているようであった。しかしながら担当教員は、児童の歩く姿や遊ぶ時の表情、子どもと自分との間主観的關係などから、何となくではあるが、「まだ何かできるのではないだろうか」と思い、もっと動ける世界の拡がりを持てるのではないかと感じ、様々の運動を指導していった。担当教員は、児童にとって、あっちの世界で行われていることを、「自分が動けておもしろい！」と感じられるように、運動を自らの意志で楽しみ、自己運動として、体を動かしてもらいたいと思いながら指導にあたっている。その際、運動そのものをはっきりと整理しながら指導したわけではないものの、児童にこうなってほしいという像は鮮明に思い浮かべて指導していた。そして、そこでは「何か変な感じ」のする動きを取り上げて、「どうして変な感じがするのか」ということと、「どうしたら良い動きになるのか」という道筋を背景に感じながら、指導に取り組み、いろいろな運動が実際に発生していった。

つまりこの例証では、指導者が運動者の主体に入り込み、運動そのものの地平分析をしながら、学習者にとって身になる、動きたいと感じるキネステーズ世界を間主観的に理解し、それまであまり持っていなかった運動経験を分析し、さまざまな運動の素となるような運動経験を身体知の財産として蓄えふやすことに努めていった。ここでは学習者にとって動感的に持ち合わせていないコツを中核としたキネステーズアナログンを移植することによって、運動の発生に導いている姿が例証として明らかとなった。

実践の場では50から60種類の運動伝承を試みているが、その中の一つとして風船

を使って指導者と学習者とが打ち合い、ボレーし、時にはスパイクのようなかたちが発生した実践がある。ここでは、学習者がこれまでに持ち合わせていなかった、自分と風船との位置関係、風船の上下するスピードを感じる動きなどを、担当教員が学習者の持ち合わせているキネステーズを探り出し、アナログンとして移植している道程を厳密に分析した。この例証では、当該の運動に関する担当教員の描く目標像と、学習者の動感世界、発生に導くための処方等の道筋が、ここには大変わかりやすく凝縮しており、学習者が、風船の動きに合わせてようと手を動かし、風船の行方を目で追いかけたり、身体を動かし、足を踏み出し、さらにボレーをしたりする、動ける世界が拡げていく様子は、学習者が面白いと感じ、なじみの世界を拡げ、だんだん自分の動ける世界を探り、より良い動きが、まぐれとして発生する様相をはっきりと映し出し、大変ゆっくりではあるがキネステーズアナログンの移植の問題解決に多くの示唆を与えてくれるものとなっている。

また本研究では、能力を持ちながらもどうしても反逆身体として、意のままにならない自分の身体の運動に関しても取り組んできた。その例証においても、モナドコツを核とした運動ゲシュタルトを自分の身体で理解することを指導者が学習者に促発指導をすることにより、キネステーズアナログンの移植と、運動の発生へと導き出している。

以上のように、単にキネステーズアナログンを抽出出来たとしても、それを移植する際には、その実践者自身の主体に入り込み実となる、動感素材としての運動者自身に取り入れることが出来るアナログンである必要がある。

人間の運動が伝承していくためには、動く人間の主体そのものに迫り、入り込み、理解し、さらにそう動きたいという衝動をどう捉えるかということをも基底に据えながら、その運動の動ける素となるモナドコツとその地平にあるキネステーズアナログンを捉えることが必要である。そして本研究の骨子である移植作業としてのキネステーズアナログンの運動者への導入は、運動者自身の動感世界に切り込むための周界と主体との関係やなじみの地平或いは原感情・原動感といったものも含めた人間の動感世界での伝承理論として成立するための重要な手がかりになる可能性を見出すことが出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①石田 讓・山本三楽、障がいを持つ子どもの動ける世界を拡げる試み、伝承、第12号、75～101頁、2012年、査読有

[学会発表] (計1件)

①石田 讓、とび箱運動における開脚とびの発生について、日本スポーツ教育学会、2012年11月11日、中京大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 讓 (ISHIDA YUZURU)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90113654

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし